

N₁TV でも TN₁V でも良いとか、N₁VN₃N₂ は受身の形になると N₃N₁VN₂, N₂N₁VN₃, N₃VN₁N₂ のいずれかの形になるということが付け加えられている。また N₁, N₂, n には名詞群 H (head) M (modifier) または yang+M で代替される。このパターンは動詞が他動詞か自動詞かによって大きく分類されているのではあるが、一方、動詞そのものの分類は文型のように、自動・他動の区別ではわり切れないようである。動詞は接頭辞、接尾辞のつき方によって8種類に分けている。その上に aspect verbs として sudah, belum などのことばを一括している。文法としては、かなり実務的便宜的に構成されていると言えるが、言語学的には種々の問題がある。

文型による説明をとりながら、練習問題がそれに十分なだけ付されていず残念である。この点、King の *Speak Malay, Write Malay* などのほうがより首尾一貫して文型練習に徹底しているようである。

単語は、「ポピュラー」なもの700語に限定してあると言うが、これも早く語彙使用頻度調査などがなされるべきであろう。選ばれた単語は大学、高校で使う学校マレー語のような感が強い。

後半の読本の部分は中途半端でむしろ前半の練習などをもっと強化すべきであろう。

誤植が散見されるが、早く第2版を出して、より良いテキストとなることを祈っている。

(前田成文・東南ア研)

Robert Ho. *Farmers of Central Malaya*. Dept. of Geography Publication, Research School of Pacific Studies, Australian National University, 1967. pp. 108.

このレポートの基礎となった調査は、著者の Ho 教授がマラヤ大学の地理学主任教授であった1965年の2月から3月の約4週間にわたって大学生を指導しながら行なった面接調査である。対象には、パハン州のトゥムルロ区の四つのムキムに住む約2000人

が抽出されている。

調査地の一つの大きな特徴は、沼地 (paya) における稲作を行なっていることである。この点水田 (sawah) 耕作田報告とは違って、ほとんど報告がなされていないので参考になる点もある。また、稲作と同時にゴム園についても調査されている。

報告の構成はまず調査の方法について述べたあと七つのセクションに分割されている。第1章は文化的・自然的背景として、移住の歴史、人口、交通、自然環境、土壌、植生などに簡単に触れている。第2章は土地資源で、土地利用、土地所有について述べられている。土地所有に関するデータはムキム単位の土地登記帳(約2千件)に基づいている。このデータに種々欠陥があることを十分認めた上で、性別、規模別による土地保有の状況、土地の共同所有、所有の形態と土地利用の関係、女性の所有者などについてデータを作表して相関関係などを調べている。

第3章は paya 耕作そのものについて述べている。特に技術的なことを除くと水田耕作と社会的経済的に顕著な差異は見られない。著者は生産に影響を与える要素を抽出するために色々の相関図を用意しているが、とにかく paya 農民の生産率が低いということは言えるとしている。それでも米を買わねばならない世帯は17%しかない。

全体の31%は田を持っていないが、88%の農民は田のほかにゴムによって収入を得ている。このゴム栽培について第4章があげられている。ゴム栽培についても米作同様、生産要因について表とグラフによって説明されている。

第5章にはゴムに関する政府の土地開発計画とゴム植替え政策が調査地と関連して述べられている。第6章の結論では、その他の作物と農業外収入および農家収入が推計されている。著者の結論は paya 耕作が時代遅れであり、その残存は他の経済的發展をまで阻害する傾向にあるという。

地図と図表の豊富な報告で、短く手際良くまとめられている。しかし、もう一步深めた所にあるマレー農民のイメージというものはこの種のレポートから期待するのは無理なことであろう。Ho 教授はこのほかにマラヤでの調査の報告の抜刷をセンターに送付されている。

(前田成文・東南ア研)